

視線を地面の方へと向けた。

「みんな、だいじなもんを見失って、どうしようもなくついで、こっちの世界に來ちやうんだらうな。ぼっかだな、こっちの世界に來たって、いいもんなんてないのに」

男が蒼の方を向く。

「お前もき、自分のいるべきところに、ちゃっちゃと帰った方がいいいぜ、俺みたいになりたくないやな。こんなとこいたってろくなことないぜ」

男の顔がなんだか寂しげで、蒼は、言葉を返すことが出来なかった。遠くから聞こえる祭り囃子がやけに騒々しい。

「ま、こっちの世界についても教えてやるからさ。今日は紫苑が舞を披露してくれるらしいし、楽しい夜になるぜ」

しおん、蒼が呟くと男はうなずいた。

「年は十三歳くらいかな。多分、ヒトノセから來たもんだと思うんだがな、まあきれいな娘でよお、そりゃ軽やかに舞うのさ。ヒトノセから迷い込んだもんは不思議と、紫苑の舞に魅せられるのさ」

男は続ける。

「それだけじゃない、ヒトノセのもんに関わろうとしない神様も見に來るのさ。やっぱり神様もべっぴんさんには弱いのかなあ」

にへえと男が頬を緩ませる。のぼせたような表情をする男がおかしくて、蒼はふきだした。

「とにかくまあ、紫苑が舞を披露してくれんのは、夜風の頃

の砂浜でよ、さつき海を見たら、波が大人しかったし、たぶんそろそろだと思ふのさ」

「ずぎあー、こぼこぼ。海の歩く音がする。村全体を漂っていた潮の香りは段々と強くなる。村を歩いている時には気がつかなくなったが、どうやらこの村は、海に面しているようだ。夜空の溶けた海を、星灯りを閉じ込めたように光る灯籠がさまよっている。神々と人がまばらに砂浜を歩いている。」

「見事なもんだろ。こっちの世界ではさ、ヒトノセで星祭りのある頃、あっちから灯籠が流れてくるのさ。無病息災とか豊年満作、あつ、恋愛成就って書いてる奴もいたな。でき、流れてきた灯籠を神様は、海から拾って、まじないをかけて、あっちの世界に返すのさ」

「ほおーとしばらくの間、海を眺めていた蒼に、男は言った。ヒトノセで山奥に住んでいた蒼は、海を見ることのできる機会は少なかった。だが今見ている海は、蒼の数少ない海との想い出を覆すまでも美しい景色だった。」

「こんな景色の中さ、物言う花の舞が見れるんだぜ。最高だろ」

「はあつと幸せそうなため息を漏らす男と、景色の釣り合わなさが可笑しくて笑いだしたくなるのを蒼は、必死に耐えた。」

「びゅうーん。尖った笛の鳴き声があった。鞭を打った時のような風が突き抜ける。刹那、生き物のたてる雑音が消えていく。三味線が声を絞り、心を貫く。舞の始まりを告げる音色に、胸が高鳴る。」

タタン。太鼓の跳ねる音とともに、少女が現れた。紫苑の登場だ。しんと尖った空間に華やかな色味が加わる。雪のように白い肌、濡鳥色の髪。紫苑という女は、多くの者を虜にするのに十分な容姿を持っていた。それだけではない。紫苑は、まるで花畑で羽ばたく蝶のように軽やかに舞っている。曲調に合わせて、ころころと変化する表情は、見ていて飽きない。きつとこの子は、舞うことを心から愛し、何度も練習してきたのだろう。素人の蒼でも直感的に悟ることが出来た。

もっと近くで見ようと、湿った砂の感触が草履ごしに伝わる足で、ゆっくりと歩きだす。ちらりと流し目でこちらを見た少女と目が合う。次の瞬間だった。

紫苑の瞳が微かに揺らぐ。ぞわり。言葉にすることの出来ない感情が蒼の体へと押し寄せる。反射的に蒼は、口を塞いだ。まさか、あの子の正体は。いや、そんなはずがない。じたばたと、忙しく思考が動く。整理のつかない感情を押し払い、もう一度、紫苑を見る。先程までは、一人一人に視線を向けていた紫苑は、蒼と目を合わせて以降、こちらを見向きもしない。もしかすると今、動揺しているのは蒼だけではない、紫苑の方も動揺を隠そうとしているのかもしれない。だとすれば間違いない、あの子は。

「しの」

蒼の掠れた声は、雅楽の音色でかき消された。

花びらを散らしたような空が夜明けを告げる前に、紫苑は仲間とともに砂浜を歩きだした。どうやら宴は終わったよう

だ。余韻に浸るかのように幾つかの見物人は、海を眺めていた。

「いやあ、きょうも紫苑様はお美しかったなあ。お前、惚れちゃったか。えっらい近づいて、目に焼き付けるように見てたけど」

呑気に語る男に対し、蒼の反応はない。突っかかるような違和感を覚えた男は、蒼の顔を力づくで自分の方へと向ける。

「おい」

男は、ぎよつとして悲鳴に近い声を上げた。蒼の顔色が、川に溺れた人のように真っ青だったからだ。やっとこちらを向いた蒼は一瞬、はっとしたような顔をする。しかし、男の手を顔から振りほどくとすぐに、走り出した。

「お、おい。ちよっ、ど、どこにいくんだよ」

男の声は、草履を叩きつけて駆ける少年へと頼りない線を描いた。

ザッザッザ。海の砂を蹴るように走る。頭の中を火花が跳ねる。肺を水で満たしたように息が苦しい。それでも、遠ざかる少女の後ろ姿を見ると、体は止まることを拒む。

「しの」

蒼は力いっぱい叫ぶ。しかし少女は、こちらを見ようともしない。首筋に刀を当てられたような痛みが全身を駆ける。ピリツとした焦りも力にし、蒼は走る速度を速めた。

「紫乃」

ようやく追いついたその手を蒼は、ぎゅつと力強く握りし

める。引つ張る力の強さに驚いたのか、やっと少女は立ち止まった。どくどく。心臓が激しく波打つ。少しでも気を抜くと倒れてしまいそうな体に鞭を打ち、なんとか踏ん張る。

「そうにいい」

紫乃は不器用に口角を上げて、言った。紅に色づいた唇が日の光を浴びて、微かに艶めく。十三とは思えぬほどに大人びた紫乃の姿に妙な気まずさを感じ一瞬、蒼は言葉を飲む。しかし、もう時間はない。喉のところまでせりあがる思いに蓋をし、蒼は呼びかけた。

「帰ろう、ヒトノセに」

紫乃の顔がほんの少しだけ陰る。蒼は紫乃がまた、離れてしまわぬように一歩、踏み出した。

「みんな、紫乃のことを待ってるよ。今なら間に合う。はやく、ここを出ようよ」

紫乃の目は、波の綾が行き来する遠くの海を映す。朝露と海を織りなしたような風が通りすぎると目の前の少女が浅く、風を吸った。

「どこかとおくにいきたかった」

紫乃の放った一言は、蒼の予見とは大きくかけ離れていた。わずかに口を開いた蒼の顔を見て、紫乃はふっと笑う。

「だーれにも期待されなくて、舞を舞ったり、歌を唄ったり、好きなことを自由にできるところに」

違う、蒼の知っている紫乃は絶対にこんなことを言わない。何かを間違えている、蒼は思った。伝えようとしていたこと

がらくたのように色あせ、錆びていく。蒼を置いて、紫乃の話は進む。

「みんな、わたしに変な理想押し付けて、失敗したら、心底がっかりした顔するの。あー、やっぱりこいつはダメなんだ。この程度なんだって。言わないだけ。お父さんやお母さんもきつとそう」

紫乃の声を、涙が邪魔をする。

「無理をして、優しいふりをしてるようにしか見えないの。こんなわたし、無理をしてまで、優しくされる必要なんてないのに」

紫乃の瞳から雫がひとつ、ふたつと光を秘めては消えた。蒼が紫乃の頬に伝うそれを拭おうと手を伸ばす。すると紫乃は、伸ばした蒼の手を拒むようにきゅつと眉を近づけた。驚く蒼を見つつ紫乃は、グイッと握られていないもう一方の手の袖で、目をこすった。

「だから、」

紫乃は涙を拭った方の手で、蒼の手を包み込んだ。そして、はにかんだ笑みを浮かべ、こちらを見た。

「もういいの。あっちの世界でわたしの体がどうなつていようと。こっちの世界も、そうにいの考えているような悪いものじゃないよ。神様も、こっちの人たちも、変な期待を寄せないで、純粹にわたしの舞を楽しみながら見てくれる。奏者も、わたしの舞に合わせるのびのびと、演奏してくれる。ねっ、すてきなところでしょ、だからわたし、ちっとも悲しく

ないの。だいじょうぶ、わたしは、こっちの世界でやってけるよ。だから、そうにだけ帰って」

海の水が、ちゃぼんと声を上げた。蒼は、紫乃からゆっくりと目を逸らした。

もしかすると紫乃は、ずっと昔からこういった悩みを秘めながらも、言葉にすることを恐れ、薄暗い心の片隅に押し殺し、気づいていないふりをしていたのかもしれない。負の感情をため続けることが出来るほど、人の心が強くないことを、蒼は知っている。長い間耐え続けた紫乃の心は、負の激流に呑まれ、壊れているのだろう。そう思うと、紫乃はカミノセで生き続ける方が幸せな気がする。この選択が紫乃にとって、本当に幸せだというのであれば、それでもかまわない。蒼は思う。

でももし、紫乃がカミノセにとどまれば、紫乃の家族から幸せは姿を消し、二度と帰ってこないだろう。紫乃も本当は、家族と離れたくはないだろう。さつきも無理やり涙を抑えこみ、話していた。この選択は本当に紫乃を、幸せにすることが出来るのだろうか。なんだか、どれが正解なのか分からなくなってくる。

ふたたび蒼と紫乃との間に静けさが訪れる。紫乃が、蒼の手をほどこうとした時だった。

「いやあ紫苑様、本日の舞もすばらしゅうございました」

蒼の後ろから、場に似合わないようなおちゃらけた男の声があった。蒼が振り向こうとすると、ぐわっ、と襟を掴まれた。

抵抗する間もなく、体が何者かの腕にぶら下げられる。

「お疲れでしょうに、うちの野郎がご迷惑をおかけして、ほんつと申し訳ございませんね」

横を見ると、カミノセを案内してくれた男が道化方のような顔をして、紫乃を見ているのが、宙ぶらりんな体の蒼でも理解できた。

「お詫びと言っちゃあ、なんです、紫苑様。今から、わたしがひとつ、おとぎ話をしてさしあげましょう」

この男、どこかで頭でも打ったのか。蒼は宝商人のように胡散臭い顔をした男を凝視した。紫乃も、同じようなことを考えているのか少し、男から離れた所で腕を組んでいる。

ぱつと突然、男が手の力を抜いた。蒼の体が海の土へと落ちていく。尻餅をつかぬよう蒼は、海水の冷たさの染みた土を足で、握りしめた。

「おい」

先程からの予測不能な男の動きに蒼は声を上げた。しかし、男はニマニマと気味悪い笑みを浮かべるだけだ。ああ、こいつはもう、誰も止められない。手の施しようがないことを悟った蒼は男を説得することを諦めて、大人しく男の話を聞くことにした。

「むかーし、ヒトノセのどこかに男がいました。名を名乗るほどの者ではありません。美丈夫でもなく、金持ちなわけでもない、どこにでもいるような平凡な男でした。男は、周りの人間と同じように、だらだらと毎日を過ごし、やがてよい

年頃になると、自分に見合った女性と結婚しました。ほんとうに、平べったい人生だったんです。しかし、そんな平凡な男にも運命の変わり目ってもんがあるわけです」

男が、朝日を食む海へと、視線を向ける。男につられて蒼も、海の方を見る。ひとつの絵が出来上がるのを眺めているように不思議と、平凡な男が一人、蒼の前につくられていく。「空が泣き止み、風が青い頃のことでした。たまには遠出がしたい、男は隣町まで嫁とともに、ちよつとした旅をしました。異変が起きたのは帰り道でのことです。螢の行きかう田んぼでのことでした」

星をこぼしたような道、澄んだ風、虫の音。美しい物語が始まりそうなところを夫婦が一組、歩く。静かながらも柔らかな時の流れに月は花笑む。

「なんと、女の体が光ったのです。月明かりや螢の灯りの反射なんでもんじゃあ、ありません。体から光があふれ出しているのです。ぎよつと驚く男に、女は言いました」

男は月があつた方を愛おしむような目で見た。どんなに手をのぼしても、必死になつて追いかけても届くことのない、誰かのことを想うような男のまなざしに、蒼はぎゅつと胸を掴まれる。

「『いつか自分は、お月さまの一部になって、ヒトノセを見守るんだ』と。女の話によると女は以前、物の怪に襲われたことがあるそうです。幸い、魂はヒトノセにとりとめることが出来ましたがそれ以来、月が姿を見せる夜に、体が光るそう

です。男はなんだか、手を離せば消えてしまいそうなほどに女が、脆いものに思えてきました。同時に男は、女のことを守りたいと願うようになりました」

蠟燭の火を消す時のように段々と、男と女の顔が暗闇に沈んでいく。暗闇の中でどこからか梟が、喉の奥で、ギョワワツと不吉な唄を掻き鳴らした。

「それから男は必死に呪術を学びました。二度と女が物の怪によって苦しむことのないように」

行燈の細い灯りを頼りに、縫るような目で書物を読む男。時折、男の顔が海に溺れていくように苦しげに歪む。蒼は何も出来ずに男の方を見る。

「しかし、男は平凡でした。呪術には当然、才能が必要です。女に対して俺はなんにもしてあげることができない。男は絶望に打ちひしがれました」

男の苦しみが染みたま言葉が、冬の夜風のように鋭く、痛い。「そんなある日、男は、夢を見ました。水の温度、海の香りがやけに鮮明な夢でした。目が覚めた後もいつもと比べ、にぎやかです。なんだか気味が悪くて男はしばらくの間、辺りを見渡しました。見ているうちに、ここがヒトノセではないと気づきました。同時に、呪術に対して僅かながらも、知識のあつた男は、カミノセであることにも気づいていました。帰らねば、男に何かがそう暗示していました。でも、帰ってもどうせ、苦しい。だったらヒトノセなんてどうでもいい、もう逃げよう。男はカミノセで生きることを決意しました」

男が海の方へと視線を変えた。海には、変わらずに灯籠が漂っている。

「でも、時々思うのです。あの人は今、あっちの世界で何をしているのかな。父さんと母さんは元気かなあって。ヒトノセでは、気づきませんでした。男には、大好きな人間が多かったです」

時折男の声に涙が滲む。つうと頬を伝う涙を拭わず、男は続ける。口元はクイツと不自然なかたちにして。

「されども、ヒトノセでの名前さえも忘れてしまった今、男に帰る方法はありません。ただ、カミノセを薄っぺらい紙のように彷徨うことしかできません」

さくつ。男の足が砂浜を噛み、動く音がした。男が紫乃の方へと歩いていく。紫乃は、逃げることなく男が近づくのを待った。

「紫苑様、確かにヒトノセってもんは、ひどいもんです。理不尽で苦くて、やなもんがそこらじゅうにうようよいいる、でもなっ、」

男は、触れられる距離まで近づいた紫乃の手をそつと握った。驚き、手をほごうとする紫乃を安心させるように柔らかく、もう一方の手で包み込んだ。

「あなたさまは、カミノセで生きるにはまだ、若すぎる。あなたはまだ、にげちゃだめだ」

男は続ける。

「おれみたいな、からっぽな奴になんてなっちゃだめだ。あ

なたは、だいじにされてるよ。カミノセまで、助けに来てくれる人がいるってどんな幸せもんさ。あんたは、上っ面だけで大事にされてんじやあない、あんたのとうさんは、かあさんはどうして、あんたに優しくするか分かるかい」

紫乃がふるふると、首を振る。男は笑い、紫乃の頭を撫でた。

「あんたといることが、しあわせなんだ。だからさ、」

男がボンと紫乃の肩を叩いた。

「生きるんだ、ヒトノセで。自分のいるべきところで生きて、幸せになるんだ」

さらさらと波が揺れる音がした。柔らかな空気の中で、時はゆっくりと前に進む。しばらくの間、海の向こうを見ていた紫乃が朝日が透けた風を飲む。

「ひとつて、ひとりでも平気なものだとおもってた。むしろ、ひとりの方がずっと、楽に生きていられるんだって。でも、ちがうんだね」

紫乃が蒼の目をまっすぐ見た。ドクンドクツとまた、胸が騒ぐ。

「そうに、わたし、ヒトノセで生きてみる」

蒼の心を花びらが舞う。蒼をしつかりと見つめる紫乃の瞳には、海を越えたとずっと向こうにある、ヒトノセがくつきりと映っていた。紫乃はもう、だいじようぶだ。これから先、何があろうと乗り越え、多くのひとを好きになり、たくましく生きていける。蒼が、紫乃へと笑いかけた時だった。

ぴー、びびびびっ。鳥が唄う。空を見ると、人よりも大きくなつた杜鵑のような鳥が蒼たちの方へと突進してくる。ヒトノセとカミノセの魂を運ぶ、迎え鳥だ。ぐるんと宙を一回転した迎え鳥は、翼を蒼たちの方に差し出す。乗れということだろう。本来迎え鳥は、ヒトノセの誰かが飛ばさなければ来ないはずなのに。蒼は、んつと頭を傾けた。

でも、迎え鳥は俺たちの方に来た。きつと乗つても大丈夫だろう。蒼は、紫乃の方を見た。

「迎え鳥は、俺らを遥か向こうにあるヒトノセまで運ぶ。これで俺らは無事、ヒトノセに帰ることが出来るんだ」

蒼が言うと、鳥がびびつと鋭く音を吹いた。急げということだろう、蒼は紫乃が鳥の背に乗るのを手伝うとすぐに、自分も背に腰かけた。

「げんきでな」

男は蒼たちにニツと笑みを浮かべ、言った。ここから先、男はまた、ひとりぼっちだ。死ぬこともできずにひとりですつと、カミノセをさまよい続けるのだろう。瞳が潤むのを抑えて、蒼は、

「おう」

と返事した。

ぎゅっ、びゅおー。鳥の体が空へと浮かんだ瞬間、突風が全身を横切る。風の重みが顔を圧迫して、息をすることさえも難しい。目が乾いていく感覚に耐え切れず蒼は、ぐつと目を瞑った。

落とされまいと必死になり、鳥の背を掴んでいると時折、紫乃の手が蒼に当たる。カミノセに行ったのは、魂のみのはずなのに触れた手は、温かい。ヒトノセで体に触れた時のようにただ温かいのではない、紫乃が一人の人間として生きている証のような、芯のあるぬくもり。

よかつた、蒼は東雲色の雲が埋め尽くしているであろう空を、思い浮かべ、鳥の背にしがみついた。風は、氷水のように冷えていて、体の熱を奪う。それでも、蒼の心はほんのりと、春を待つつぼみのようにうららかだった。

パタパタと廊下を踏む音がする。抑えられた丸みのある話し声、竈の火が跳ねる音、小鳥が紡ぐ唄声。ヒトノセの朝だ。蒼は、じんわりと障子戸に霞む朝日を眺めた。先程までの体験が嘘だったかのような、穏やかな朝だ。

ゆっくりと上半身だけ体を起こすと、横になり、瞳を閉じた少女の横顔が、目に入る。紫乃だ。まだ、眠っているのだろうか。蒼は、紫乃の顔をじっくりと見た。

「その子なら、もうじき目を覚ますさ」

背後から、声がした。ほんのしばらく聞いてはいなかったが、聞きなれた声に、蒼はビクツと肩を揺らした。

「ねえや、いつのまに。てか、帰って来てたの」

「あんたがいつまでもぬぼーとしていてるから、声をかけてなかつただけで、さつきからいたよ。心配するな、お前が思うより、その子は強い」

いつもより素っ気ない口調でねえやは言うと、蒼の隣にどつかと腰を下ろした。

「まさか呪術を学ぶ人間が、迎え鳥なしにカミノセに飛び込むなんてねえ、ほんつとびつくりさ」

ねえやは、ぎつと目を尖らせた。いつもよりも鋭い視線に、目を合わせる事が出来ない。情けない弟子の姿をとがめるわけでもなく、ねえやは続ける。

「幸い、やさしい師匠が助けてやったからいいものの、あんな、迎え鳥なしにどうやってヒトノセに帰ろうとしてたんだい。迎え鳥なしじゃ、あんたはカミノセをずっと彷徨うことになるんだよ。あんたまで、帰れぬひになるところだったんだよ」

大切な何かをくりぬかれたような痛みが全身に走る。蒼は胸を押さえて、俯いた。じわじわと針が皮膚を刺すような空気が、部屋に広がる。水のような汗が手に張り付く。しばらくの間、ねえやは何も言わずに、蒼を見ていた。

「でも、あんたはひとを救うことが出来た。これは、立派なことさ。よくやった」

ねえやの声色がまあるくなる。先程までの荒波のような激しさのない声に、蒼は目をぼちくりと開いた。

「ひとは丈夫なように見えて、脆いものさ。ちよつとしたことで、傷ついて壊れたり、消えたりしてしまう」

ねえやの声は、普段からは想像できないほどに穏やかだ。感情をとうの昔に、捨ててしまったような穏やかさ。蒼は、

何も言うことが出来ず、ねえやの言葉を待った。

「それに、大切な人を失う悲しみほど辛いものはないさ」

そう言うとなえやは、朝日の差す障子戸の方を見つめる。

ヒトノセではない、ヒトノセよりもずっと遠くを見つめるようなまなざしをするねえやに、何も言うことが出来ない。蒼はねえやの目線の先を見た。しばらくの間、ねえやは、ぼんやりと、障子戸を見つめると、蒼の方へと視線を戻した。

「わたしも見に行ったけど、カミノセはここ最近、乱れてきている。あんたもカミノセに行ったとき、思っただろ。人が多いなあつて」

ねえやの声は、いつもと同じ声色へと戻った。突然の変化に驚くも、蒼はしっかりと首を縦に振った。

「本来、カミノセに人は、入ることは出来ない。当然さ、カミサマと人は、一緒に住むなんてことは不可能だ。じゃあなんで今、カミノセに人が入ることが出来ているのか、答えは簡単。カミノセが歪んでいるからさ。カミノセは今確実に、悪い方へ悪い方へと進んでいる。歪んだままで、何も起こらないはずがない。カミノセが、壊れるときが必ずくる」

人よりもはるかに強いカミノセが壊れてしまう、そうなる絶対、ヒトノセもそのままではいられるはずがない。蒼は、体をよぎる嫌な感触に、手足が冷えるのを感じた。バクバクと音を刻む心臓が五月蝍い体に震える蒼の背中を、ねえやは、ぼしんと叩いた。

「だから、あんたにはまだまだ修行が必要さ。今回の件で、



いろいろ学んだことがあるだろう。自分に足りないものは何か、よく考えて、この先の自分への糧にするんだ」

ねえやが、蒼の瞳をじっと覗き込む。

「いいかい、強くなるってのは、己に勝つてことだ。修行は、誰かに見せるためのものじゃない、今までの自分を見つめ、己の力で魂を制するためのものさ。今からあんたは常に、自分と闘わなければならない、いいね」

まっすぐに投げられる言葉の灯に蒼は、体が熱くなるのを感じた。熱が戻った手にぐっと力を入れて、立ち上がった時だった。

「おや、お嬢様のお目覚めのようだね」

ねえやが、口笛を吹くように軽やかに言った。お嬢様の目覚まし、もしかして紫乃が起きた。慌てて蒼も、紫乃を見ると、紫乃はゆっくりと体を起こし、こちらへと上半身を向けた。

「ああ、一週間くらいこっちじゃあ、体を動かしてないからねえ、いきなり立ち上がっちゃあ、だめだよ、とりあえずはここにいて。えっとお、まずは何か体にいいものを食べさせてやらないとだねえ。おい蒼、ちよつとは気を利かせないかい、いつまでも突っ立てないで、誰か人を呼んでおいで。あっ、あと、この子のご家族に目を覚ましたって、言つといで。

さあ、はやく」

ねえやにせかされて、バタバタと蒼がふすまの方へと走った時だった。

再び体を横にしようとしている紫乃と目があつた。紫乃は、顔を綻ばせた。蒼は、紫乃の表情に答えるようにニカツと笑い返し、手を振った。

庭の木々は、太陽の光が宿った雫をまとい、さわさわと揺れている。じんわりと湿っていた夏風は、遠くの街への旅支度をし、凜と澄んだ秋風の横を通り過ぎる。

もうじき夏は終わる。星祭りが終われば、秋はもう、すぐそこだ。秋は行事も多く、呪術師見習いとはいえ、蒼もすべき仕事が増えて、ますます忙しくなるだろう。でも、蒼は決めた。強くなる、今までの己を超えて、たくましく生きること。そして、ヒトノセとカミノセ、どちらも救う方法を見つけてやることを。そのために、

(まずは、今すべきことをしなくては。椎たちに早く、紫乃のことを伝えよう。みんな、どんな顔をするかな)

蒼は、紫乃の家族がいる部屋へと足を早めた。